

日本科学未来館とは

日本科学未来館は、21世紀の新しい知を分かち合うために、すべての人にひらかれたサイエンスミュージアムです。

活動の中心にあるのは先端の科学技術。これは私たちの現在を変革し、次の時代を切りひらく大きな可能性をもつ「新しい知」です。日本科学未来館では、さまざまな分野に波及するこの先端科学技術の営みを人間の知的活動という視点から捉え、私たちを豊かにする文化の一つとして社会全体で共有することを目指しています。

名 称	にっぽん かがく みらいかん 日本科学未来館（略称：未来館） National Museum of Emerging Science and Innovation
愛 称	Miraikan
館 長	毛利 衛
運 営	独立行政法人科学技術振興機構（JST）
開 館	2001年7月
所在地	〒135-0064 東京都江東区青海2丁目3番6号
URL	http://www.miraikan.jst.go.jp/

■設立の理念

科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について考え、語り合うための、すべての人々にひらかれた場。

■シンボルマーク



デザイン：廣村正彰

「Miraikan」という愛称についている青いシンボルマークは、正円と、正円を駆けめぐる円弧とで構成されています。「地球と衛星軌道」、「細胞分裂」、「地球上のさまざまなネットワーク（人と人、情報）」、「電子の動き」などをイメージさせるものです。

■スローガン

科学が
わかる 世界が
かわる

日本科学未来館の姿勢を表明しているのが、「科学がわかる 世界がかわる」というスローガンです。

「科学がわかる」とは、必ずしも科学を学習し、理解することを意味しません。先端の科学技術という「新しい知」に触れることで、新しいものの見方と出会う。それも「科学がわかる」ことの一つです。「世界がかわる」とは、それによって周囲の世界が違って見えてくること、そしてそのことが、世界をよりよい方向に進めていく力となることを指しています。

「新しい知」によって「かしこく生きる」社会をつくらうとする未来館の姿勢が、このスローガンにこめられています。

沿革

日本科学未来館は、科学技術創造立国のための「科学技術基本計画」に基づき、科学技術への理解を深めるための拠点として国際研究交流大学村内に建設され、2001年に開館した国立の科学館です。

1995年 11月	科学技術基本法が成立 科学技術の振興を進めることによって科学技術創造立国を目指すことを目的とした科学技術基本法が成立
1996年 7月	科学技術基本計画が策定 科学技術基本法の成立を受けて総合的・計画的な施策を推進するための科学技術基本計画が制定
1998年 12月	「国際研究交流大学村」の建設が決定 文部省、通商産業省、科学技術庁の三省庁 ^(※1) が合同で、臨海副都心地区に「国際研究交流大学村」を建設することが決定 科学技術庁傘下の科学技術振興事業団 ^(※2) が、この大学村内に最先端の科学技術の展示、展示手法の開発、研究者の交流などを通じて科学技術の情報を発信していく施設を整備することになる ※1 2001年1月、省庁再編成により文部科学省、経済産業省の二省となる。 ※2 2003年10月より独立行政法人科学技術振興機構(JST)となる。
1999年 12月	着工開始
2000年 3月	総合監修委員会を設置 日本科学未来館のあり方などについての審議を行うため、JSTに総合監修委員会を設置し、展示計画、活動方針などについて具体的な検討を2000年12月まで重ね、それをもとに館の整備が進められた
9月	施設の名称を「日本科学未来館」に決定
10月	毛利衛が館長に就任
2001年 3月	建物が完成
	シンボルマーク決定
7月9日	日本科学未来館が開館
2007年 4月	民間委託の拡大による運営体制に移行
2010年 10月	日本科学未来館の運営体制の見直し 2009年11月に開催された行政刷新会議「事業仕分け」の結果を受け、予算を縮減しつつ、JSTによる運営業務直執行体制となる新生未来館が発足 国際総合監修委員会、「Miraikanフォーラム2010」の開催 未来館の今後の活動の方向性について国際的な視座から審議するため、国際総合監修委員会を設置。地球人類の持続的発展に向けた科学館の役割や、未来館が世界トップレベルのサイエンスセンターとして果たす役割・方向性について「Miraikan Message 2010」にまとめ、「Miraikanフォーラム 2010」において発信

日本科学未来館のとりくみ

先端科学技術と人とをつなぐための拠点として、主に3つのことにとりくんでいます。

1. 科学を伝える——先端科学技術の情報発信と伝達手法の開発

常設展示、企画展、映像、イベントなど多彩な方法と切り口で、「新しい知」としての先端科学技術を館の内外で伝えると同時に、伝え方そのものについても独自の手法開発を行っています。

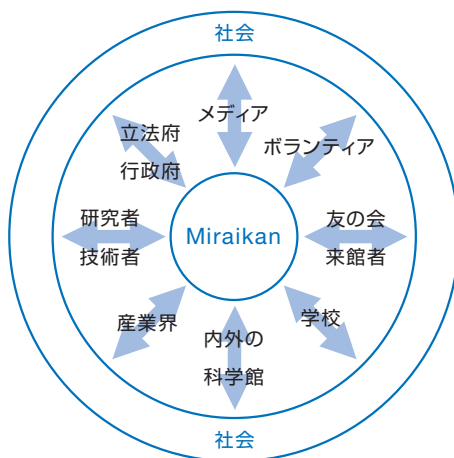
2. 人材を育てる——科学コミュニケーターの育成

未来館で行っている「科学を伝える」活動の実践を通して、科学者・技術者と一般市民との橋渡しをする科学コミュニケーターを館の内外に育成し、人材の輩出を図ります。

3. つながりをつくる——8つのネットワークの形成

研究者・技術者、メディア、ボランティア、友の会・来館者、立法府・行政府、学校、内外の科学館、産業界の8つを、未来館の活動と社会をつなぐインターフェースと捉え、ネットワークの構築に努めています。

8つのネットワーク



日本科学未来館における科学コミュニケーション活動とは

■対話の場の創出

持続的に発展する豊かな社会の実現のため、さまざまな人が参加する対話の場を創出します。それぞれの価値観を認め合いながら、未来の方向性について合意形成を目指した議論を行います。

■新しい知の提供

未来社会を議論する上で必要な、文化としての科学技術によって得られた新しい知を提供します。新しい知とは、宇宙における私たち人間の立ち位置の理解、およびより良い社会システム構築のために人間活動を支援する方法です。

この新しい知を、以下の3つの観点に着目して伝えます。

1. 社会の抱える問題の科学的な捉え方を示します。それにより、事実に基づく論理的な議論を通じて、問題を解決に導くことができます。
2. 新しい科学技術が社会をどのように変化させるのかを示します。それにより選択し得る未来社会像を共有します。
3. 先端研究によって拓かれる、新しい世界観を伝えます。それにより人々の抱く価値観は更新され、未来社会を方向付けます。

■社会との共鳴

人々が新しい未来社会を目指すには議論を通じての理性的な納得のほかに、個々人が抱く心情的な納得も必要です。科学技術だけでは成し得ない、人と人との関係も大切にし、社会との信頼関係を築きます。

このような科学コミュニケーション活動において、次の3つに留意します。

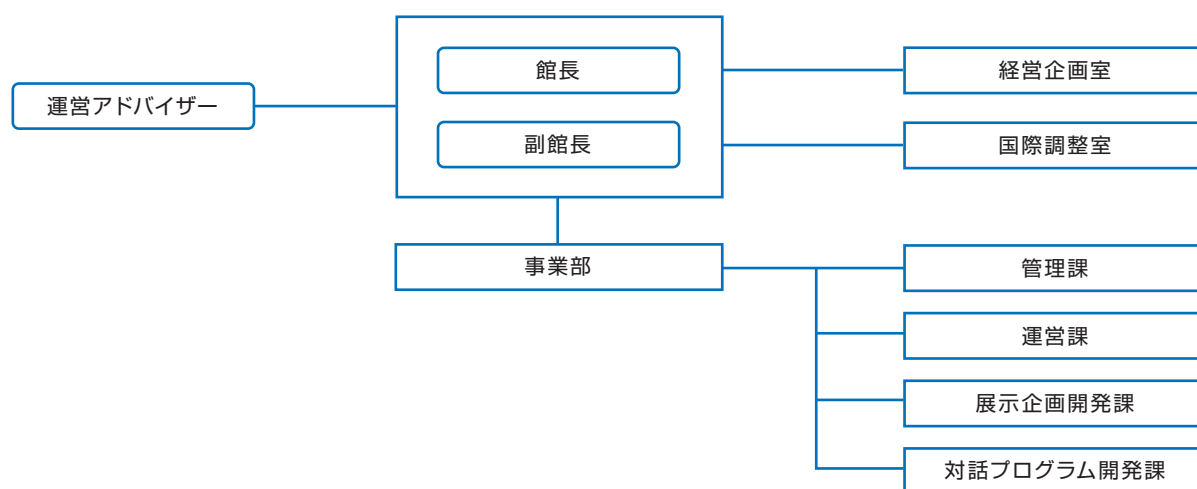
1. 科学コミュニケーション活動に参加することが、参加者にとって喜びをもたらすものにします。それにより、参加者が単なる受け手にとどまらず、積極的な関与者となります。
2. 活動する科学コミュニケーターが、やりがいのある活動として実践します。それにより、参加者から共感を引き出すことができます。
3. 科学コミュニケーション活動によって、社会全体に利益をもたらします。それにより、科学コミュニケーションが社会を豊かにする価値ある活動として、人々に理解されます。

組織

■日本科学未来館 役員

館長 毛利 衛
副館長 片山 正一郎

■組織体制



2014年4月1日現在

日本科学未来館の事業評価について

未来館の運営や各種活動に関する目標と年度計画は、独立行政法人科学技術振興機構の中期計画に基づいて策定しています。年度計画の達成状況は、「日本科学未来館運営評価委員会」が評価をし、同時に改善提案を審議します。その改善提案は、未来館の事業運営に反映させます。また、評価結果は「日本科学未来館総合監修委員会」にも報告します。総合監修委員会では、今後の展示や科学コミュニケーション活動の計画、運営方針などについて審議・監修が行われます。どちらの委員会も以下に示すように外部の有識者で構成されています。

運営評価委員会

未来館が作成する年度計画の達成状況を評価し、その評価結果に基づいて事業運営の改善提案を審議します。

委員長

赤堀侃司／白鷗大学 教育学部長

委員（順不同、敬称略）

大月ヒロ子／有限会社アイデア 代表取締役

染川香澄／ハンス・オン プランニング 代表

中瀬勲／兵庫県立人と自然の博物館 館長

本吉洋一／国立極地研究所 副所長

森 俊哉／有限責任あずさ監査法人 代表社員

渡部潤一／国立天文台 副台長

総合監修委員会

未来館のあり方や活動方針、展示計画、施設整備や運営の基本計画などについて審議・監修を行います。

委員長

金澤一郎／国際医療福祉大学 大学院長

委員（順不同、敬称略）

青野由利／毎日新聞 論説委員

海野正／日本公認会計士協会 専務理事

北澤宏一／東京都市大学 学長

榊 裕之／豊田工業大学 学長

佐々木かをり／株式会社イー・ウーマン 代表取締役社長

高柳雄一／多摩六都科学館 館長

立花 隆／ジャーナリスト

太田英昭／株式会社フジ・メディア・ホールディングス 代表取締役社長

中村桂子／JT生命誌研究館 館長

早川 茂／トヨタ自動車株式会社 専務役員

林 良博／独立行政法人国立科学博物館 館長

国際総合監修委員会 (International Advisory Board)

国際総合監修委員会 (IAB) は、未来館の総合的な評価および今後の活動の方向性について国際的な視野から評価し、的確な事業展開を図るため、独立行政法人科学技術振興機構 (JST) によって2010年6月に設置された委員会です。本委員会は、世界各国の科学技術分野・科学館分野の第一人者によって構成されており、地球人類の持続的発展を目指す科学技術のあり方と科学館の役割を議論し、未来館が世界トップレベルのサイエンスミュージアムとして果たす役割・方向性についてアドバイスを得る場です。

委員（順不同、所属・役職は当時、敬称略）

ブルース・M・アルバーツ／アメリカ Science (AAAS) 誌 編集長

ゴリー・デラコート／イギリス アット・プリストル科学館 館長

クロード・エニユレ／フランス Universcience: 科学産業都市 (科学都市博物館) および発見の殿堂 (科学博物館) 館長

スバント・リンドキスト／スウェーデン 王立科学アカデミー 会長

ラジェンドラ・K・パチャウリ／インド 気候変動に関する政府間パネル (IPCC) 議長

李祥義／韓国 国立果川科学館 館長

徐延豪／中国 国立 中国科学技術館 館長

安西祐一郎／日本 慶應義塾 学事顧問・慶應義塾大学理工学部 教授

金澤一郎／日本 日本学術会議 会長

豊田 皓／日本 株式会社フジテレビジョン 代表取締役社長

中村桂子／日本 JT生命誌研究館 館長

吉川弘之／日本 独立行政法人科学技術振興機構 (JST) 研究開発戦略センター長

国際総合監修委員会「Miraikanメッセージ」

日本科学未来館は、2011年度に開館10周年を迎えるにあたり、世界各国の科学技術分野・科学館分野の第一人者を委員とした国際総合監修委員会(IAB)を2010年10月に開催し、国際的サイエンスコミュニケーション推進に関わる「Miraikanメッセージ2010」を世界にむけて発信しました。

「Miraikanメッセージ2010」は、国際総合監修委員会での議論をもとに、人類が直面する地球規模課題の解決のために、科学館が果たす役割についての提案であり、日本がリーダーとして世界に貢献するための重要な提言です。

■Miraikanメッセージ2010

1. 地球規模の課題には人類のあらゆる知恵を総動員する対策が必要です

地球温暖化や生物多様性といった地球規模の課題は、人類存続に脅威を与える問題であり、同時に、私たち一人ひとりの毎日の生活に衝撃を与える個人の存続の問題でもあります。賢者は「あなたが見たいと思う世界の変化にあなた自身になりなさい」と言っています。それゆえ、私たち一人ひとりには、この地球規模の課題の解決のために取り組む役割があります。

人類はこれまで社会的集団として持続的に生き延び、より豊かな暮らしを得るために育み伝承してきた知恵を持っています。これらの地球規模の課題を改善し、対策を実行するためには、人間のあらゆる知恵を総動員することが必要です。

2. 文化としての科学技術

文化とは、人類がこれまで育み伝承してきた知恵の総体を意味します。すなわち、政治、経済、宗教、倫理、芸術・スポーツ、そして科学技術などすべての人間活動が含まれます。

私たちは、科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について、考え、語り合う場をつくります。

3. 日本科学未来館はグローバルな活動を発展させます

地球規模の課題解決には国際協力が必要です。しかし、各国が自国の利益に重きを置けば、解決策を見つけることは困難となるでしょう。重要なことは、すべてのために持続可能な地球環境を確かなものにするグローバルな視点を持つことです。そのためには、世界が受け入れられる科学的なものの見方が必要となります。それこそが、人類の文化の一翼を担う科学技術であり、人類共通の価値を共有して公益に役立ちます。

日本科学未来館は、科学技術を身近な文化にする活動に取り組んできました。そして、その活動を地域、全国、そして世界に広げようとしています。私たち国際総合監修委員会(IAB)は、われわれの惑星・地球を守るために、世界的な協力と協調を通して、この活動を推進することを支持します。

日本科学未来館 名誉館員

名誉館員制度は、開館3周年を記念して2004年7月に創設されました。この制度は、科学技術に特に顕著な貢献によりノーベル賞、フィールズ賞など国際的に認められる賞を受賞され、未来館への理解と協力をいただいた研究者を顕彰し、未来館として敬意の念を表すものです。

■名誉館員（順不同、敬称略）

小柴昌俊／東京大学名誉教授（2002年ノーベル物理学賞受賞）
白川英樹／筑波大学名誉教授（2000年ノーベル化学賞受賞）
田中耕一／島津製作所田中耕一記念質量分析研究所長（2002年ノーベル化学賞受賞）
野依良治／理化学研究所理事長（2001年ノーベル化学賞受賞）
ハロルド・W・クロトー／米国フロリダ州立大学教授（1996年ノーベル化学賞受賞）
リチャード・ティモシー・ハント／英国 キャンサーリサーチUK (Cancer Research UK)（2001年ノーベル生理学医学賞受賞）
アレクセイ・A・アブリコソフ／米国アルゴンヌ国立研究所（2003年ノーベル物理学賞受賞）
江崎玲於奈／茨城県科学技術振興財団理事長（1973年ノーベル物理学賞受賞）
ラジェンドラ・K・パチャウリ／気候変動に関する政府間パネル(IPCC) 議長（2007年ノーベル平和賞受賞）
ペーター・A・グリュンベルク／ユーリッヒ研究所教授（2007年ノーベル物理学賞受賞）
ルドルフ・A・マーカス／カリフォルニア工科大学教授（1992年ノーベル化学賞受賞）
小林 誠／高エネルギー加速器研究機構特別荣誉教授、日本学術振興会理事（2008年ノーベル物理学賞受賞）
益川敏英／京都産業大学教授（2008年ノーベル物理学賞受賞）
山中伸弥／京都大学iPS細胞研究所(CiRA)所長（2012年ノーベル生理学医学賞受賞）
鈴木 章／北海道大学 名誉教授（2010年ノーベル化学賞受賞）
根岸英一／パデュー大学 特別教授（2010年ノーベル化学賞受賞）
ブライアン・シュミット／オーストラリア国立大学 名誉教授（2011年ノーベル物理学賞受賞）

2014年4月現在

MOU（Memorandum of Understanding）

MOUは、学術研究相互協力および教育研究協力に関する協定（友好協力の覚書）です。

日本科学未来館では、国内外の科学館や大学・研究機関などとMOUを交わしており、情報交換や人材交流、イベントの共同開催などを行っています。

■MOU締結先（五十音順）

アルス・エレクトロニカ（オーストリア）
カナダ科学技術博物館公社（カナダ）
国立 果川科学館（韓国）
広東科学センター（中国）
クエスタコン国立科学技術センター（オーストラリア）
国立 中央科学館（韓国）
一般社団法人 ナレッジキャピタル（日本）

2014年3月現在

研究エリア

展示スペースの奥には、最先端の研究を行う外部のプロジェクトチームの研究室があります。科学館という一般の人に開かれた場に、このような研究室を併設しているのは極めて珍しいことです。また、来館者向けにボランティアによる見学ツアー「研究棟ツアー」を定期的を開催し、夏休み期間には研究者と科学コミュニケーションが協働で企画するイベント「Miraikanラボ」を実施しています。

現在行われている研究プロジェクト	研究代表者(所属)
●光電変換プロジェクト 次世代の太陽電池の研究を分子レベルでの設計から行っています。	長谷川 哲也、松尾 豊(東京大学大学院理学系研究科)
●ロボットOSプロジェクト 100万分の1秒単位で制御ができ、故障も瞬時に検知可能な、ロボット用OSを研究開発しています。	加賀美 聡(産業技術総合研究所デジタルヒューマン工学研究センター)
●空中3Dディスプレイプロジェクト スクリーンや霧などもない空中でも、文字や画像を描画できる技術をつかい、大型ディスプレイを開発しています。	木村 秀尉(株式会社エリオ)
●人々が集う場の情報メディアプロジェクト 多人数が集う場での利用を前提に、人々の直観的理解や対面コミュニケーションを自然に促す情報メディア技術を研究しています。	苗村 健(東京大学大学院情報学環)
●リビングラボ東京プロジェクト ぬいぐるみやクッションなどの柔軟物を用いた、計測手法、情報提示手法、インタラクション手法の研究開発を行っています。	稲見 昌彦(慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科)
●インタラクション理解プロジェクト 未来館の科学コミュニケーションのインタラクションを分析し、「よりよいインタラクション」とは何かを明らかにします。	坊農 真弓(国立情報学研究所)
●ヒューマノイドプロジェクト 人型汎用ロボットが活動してゆけるように、周囲に応じて適切に注意誘導する遠隔操縦技術を、実検証を通じて開発しています。	稲葉 雅幸(東京大学大学院情報理工学系研究科)
●さわれる情報環境プロジェクト 3D映像と触覚提示を統合した、見たものを見たままにさわれる情報環境の構築を目指し、「触原色原理」に基づいて、触覚を記録し伝送して再現するとともに、編集し創造するための研究開発を行っています。	舘 暉(慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科)
●次世代疾患モデルマウスプロジェクト 医学において重要な研究開発ツールである遺伝子改変マウスを短期間で効率的に作製する新技術を開発しています。	新藤 隆行(信州大学大学院医学系研究科)
●精神疾患の中間表現型「非成熟脳」解明プロジェクト 心理学的な異常を示す遺伝子改変マウスを調べたところ、脳の中に未成熟な部分があることを発見しました。この部分を成熟させて、心の病の予防・治療法を開発することを目指しています。	宮川 剛(藤田保健衛生大学総合医科学研究所)

2014年3月現在

研究プロジェクトの詳細、ツアーの参加方法については、HPをご覧ください。

[研究プロジェクトについて] <http://www.miraikan.jst.go.jp/aboutus/facilities/>

[研究棟ツアーについて] <http://www.miraikan.jst.go.jp/event/other/>

展示物の貸出

■巡回展・展示物の貸出

これまでに開催してきたオリジナル企画展を、国内外の科学館などさまざまな施設に貸し出しています。

●「科学で体験するマンガ展」

人々に想像力や夢を実現するための原動力を与えてきた、マンガに描かれるヒーロー・ヒロインの能力を、科学技術で再現します。

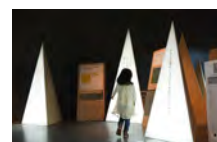
対象年齢：小学校低学年～大人
会場面積：応相談



●「世界の終わりのものがたり」

すべてのものごとに等しく訪れる「終わり」に対し、科学技術になにできないのが出来ないのかを考える展覧会です。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場面積：～600㎡ ※応相談



●「時間旅行」展

—TIME! TIME! TIME!

科学的視点による多様な「時間」の世界を「旅」していくというコンセプトに基づいた展示です。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場面積：～600㎡ ※応相談



●「'おいしく、食べる'の科学展」

現代の食をとりまくさまざまな疑問や問題に対し、先端科学技術の視点で迫ります。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場面積：～380㎡ ※応相談



●「波瀾万丈! おかね道

—あなたをうつし出す10の実験」

お金と正面から向き合い行動する心構えを身につける展覧会です。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場面積：～700㎡ ※応相談



●「きみのみらい・みらいのきみ

—かこさとしと探しにいこう、絵本の中へ」

日本を代表する絵本作家、かこさとし氏から未来をになう子どもと親へ、バトンを引き継ぎ、ともに語り合うための展示です。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場面積：150㎡ ※応相談



詳しくは、下記までお問い合わせください。
日本科学未来館 巡回展担当 03-3570-9215

大型映像の貸出

■大型映像の制作・配給

日本科学未来館では研究機関・映像制作会社など外部機関の協力を得て、オリジナルの大型映像作品を制作しており、国内外の多くの科学館等にて上映されています。

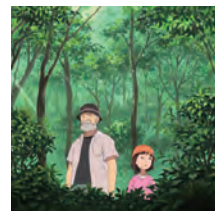
●「ちきゅうをみつめて」 (2011年)

配給：有限会社アニメイノベーション東京



●「Young Alive! ～iPS細胞がひらく未来～」 (2010年)

配給：株式会社電通テック



●「FURUSATO —宇宙からみた世界遺産—」 (2010年)

配給：株式会社 TBSビジョン



©日本科学未来館/TBSビジョン

詳しくは、下記までお問い合わせください。
日本科学未来館 大型映像巡回担当 03-3570-9206

パートナーシップ制度

一般社会と関わりの深い産業界との協力関係を構築することで、科学技術と社会とのコミュニケーションの活性化を図ることを目的としたパートナーシップ制度を設立しました。この制度を通し、急速に発展した科学技術の現状に向き合いながら、社会が必要とする情報発信や、地域社会への積極的な普及活動を推進していきます。

パートナーシップ制度は、3つの大きな支援を軸としています。

オフィシャル パートナー (プラチナ／ゴールド／シルバー)	館内の展示制作からアウトリーチ活動にいたるまで、科学技術と社会とのコミュニケーションの活性化に資する取り組みを、当館とともに総合的に行う支援機関
パートナー	日本科学未来館の理念に賛同し、科学技術の振興と理解増進を支援する機関
オフィシャル サプライヤー	日本科学未来館の理念に賛同し、主に展示内容および展示品の支援を行う機関

■協賛金の使途

未来館の常設展示開発資金、企画展の実施資金などに活用させていただきます。

■オフィシャル パートナー

〈プラチナ〉

〈ゴールド〉

RICOH
imagine. change.
株式会社リコー

〈シルバー〉

AsahiKASEI
旭化成株式会社

 中外製薬
 ロシュ グループ
中外製薬株式会社

 **YAZAKI**
矢崎総業株式会社

■オフィシャル サプライヤー

レゴ ジャパン株式会社
株式会社 岡村製作所
有限会社 ラド
株式会社 日立ハイテクノロジーズ
シグマ アルドリッチ ジャパン合同会社
ヤマハ株式会社
ライフテクノロジーズジャパン株式会社

2014年4月1日現在

メンバーシップ

未来館のメンバーシップには、深く科学にふれながら未来館の活動と一緒に作りあげる「クラブMiraikan」と、1年間何度でも常設展に無料で入れる「年間パスポート」があります。

■年会費

クラブMiraikan		年間パスポート	
個人	ファミリー	個人	ファミリー
5,140円	10,290円	1,230円	2,470円
-	4名様まで有効。5名以上は1名につき2,060円追加	-	同居のご家族全員

■会員特典

特典	クラブMiraikan	年間パスポート
①会員向けイベントへの参加	○	-
②ドームシアターガイアの事前予約	○	-
③常設展の無料入場	○	○
④企画展の優待入場	○	-
⑤館内カフェや館内ショップの割引など	○	○
⑥未来館のイベントや科学情報の提供	○	○
⑦他館の割引入場	○	△

会員数 （2014年2月末時点）

クラブMiraikan	2,140人（724世帯）
年間パスポート	14,704人（5,076世帯）

詳しくは、下記までお問い合わせください。
日本科学未来館 館内アクティビティ担当 Tel: 03-3570-9151(代表)

ボランティア

展示解説、実験工房やイベントの運営支援、ボランティア主体のグループ活動など、多様なかたちでボランティアが活躍しています。ボランティアは、自分自身をより高めたいという人たちの集まりです。その活動は、日本科学未来館の主旨をもっとも反映しており、新しい社会貢献の姿でもあります。

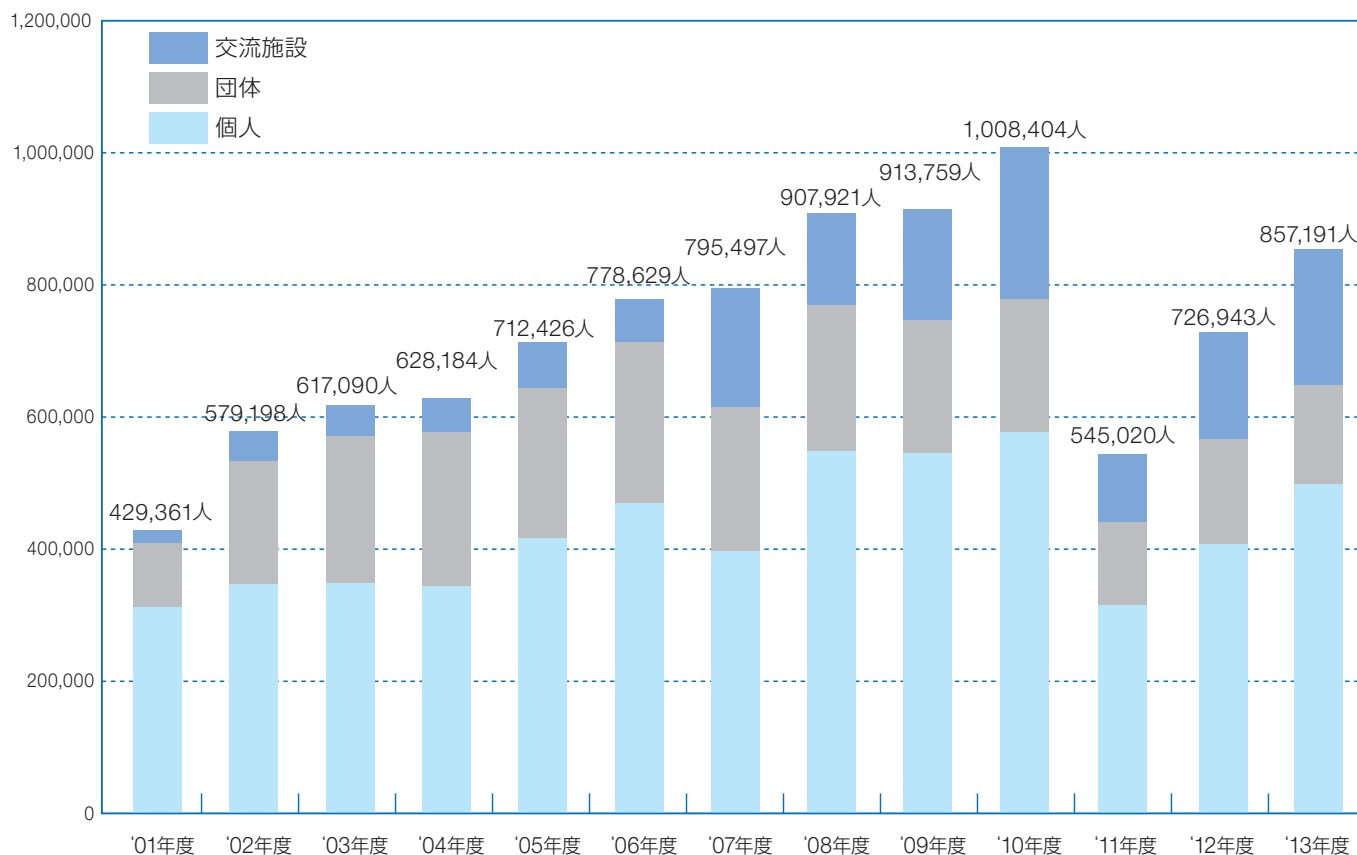
ボランティアには3つのカテゴリー（活動方法）があり、多様な活動を展開しています。

カテゴリー	レギュラーボランティア	サテライトボランティア	スタッフボランティア
活動頻度	年間12回以上	年間12回未満	週1回以上
活動内容	・展示解説等の来館者対応、 イベントのサポート ・ボランティア主体のグループ活動	・レギュラーボランティアの活動 内容に準じる	・レギュラーボランティアの活動内 容に加え、ミニトークや各種実演、 展示フロア運用の実務サポート
条件	・高校生以上	・高校生以上 ・継続的に活動可能な方 （夏休み期間のみ、等の一時的な 活動は該当しません）	・20歳以上 ・レギュラーボランティア又はサテ ライトボランティアで活動後、希 望者から選考します

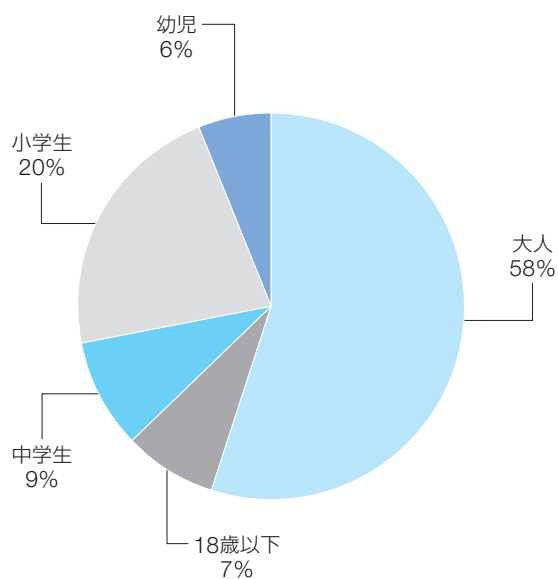
参加申込みなど詳しくは、HPをご覧ください。
<http://www.miraikan.jst.go.jp/join/volunteer/>

来館者データ

来館者数推移



年代別内訳 (2013年度)



団体来館者における地域別内訳 (2013年度)

